

## 【Snowbell Official AlbumNotes】

ワンと鳴いてニャン創設期にレインスティックや打楽器の準レギュラーとして活躍をした元メンバーのMAO選手によるアルバム「Snowbell」全曲解説です。

### 01. S NOBvEL

このバンドのアルバムの1曲目は静かな楽曲。そういう固定概念が私には少なくともあった。イントロを聞き、あれ？これはかつて私も参加したライブのSEで流れていたあの静かな曲だ。でも前作に入っていたしどうということ？という大きな疑問を次の瞬間一瞬にして吹き飛ばしたサウンドが私の心を驚かせた。今までにないような疾走感全開のメタルテイストのリズムに、長らくライブのスタートSEで使われていた「Fountain」のメロディが融合されている。こんなドラマチックなオープニングで始まるアルバムだとは想像も出来なかったのでいきなりスノーベルの世界に引きずり込まれた錯覚に陥った。そう、Fountainはここに繋がっていたのだ。まさに完成形。ボーカリスト「+Kaise」選手の完璧な歌声と疾走感だけじゃなくエッジの効いた激しいギターや暴れまわるピアノの音色。1曲目からONE MORE Purple全開。

### 02. アシオト ～The time is ripe～

S NOBvELから流れるように自然に次のアシオトへと場面は切り替わっていった。あれほど美しく美しい大作の後を静かに受け止めるかのように待ち構えていたのがこの「アシオト」だった。この曲を含めて6曲目まで「+Kaise」選手がボーカルを務めているが、これだけの大型チーム。ボーカルが複数いる状態で1曲ごとに異なるボーカルを起用するとオムニバスアルバムのようになり、全曲同じボーカルだとチーム感がなくなるとのことで前半と後半に2名の「エース」としてチームを引っ張るボーカルが。その真中に他のボーカルを起用ということで作品の統一感が実に見事だと感じて取れる。これだけのボーカルを擁しても自然にひとつのアルバムにまとまっているのは芸術度の高さを感じるまでである。それをまさに象徴するような曲であり、「増角雨海」選手作曲のメロディがチームに新たな風を吹かせている。

### 03. ユルセナイヤツ (Snowbell ver.)

すでにリリースされていたシングルでは「なぐさ。」選手のボーカルとして発表されていた楽曲なので、まったく声質の異なる「+Kaise」選手によって別の作品として生まれ変わったこの楽曲の奥深さを知ることが出来る。転調が多く景色がどんどん変化していく様で、怒りの感情がこれでもかと込められているものの、繊細で美しいメロディが引き立っている。この楽曲では普段あまり目立つことのない様々な楽器の音色も多く含まれていて、チーム全員で作上げた完成品なんだなという印象を受ける。ボーカルが異なるだけでもこんなにも大きな変化を起こせるということを証明し、バンドがチーム型のロックバンドであることの今後の可能性の広がりにも期待を高めたい。そんな仕上がりに感激と共に、トップバンドのONE MORE Purpleはポップでもキャッチーでもなく力強いメッセージを野太いサウンドで惹きつける唯一無二のカッコイイバンドであることも実感することになるだろう。

#### 04. ANOTHER NO FACE

初めて聞く方は、この4曲だけでも「相当幅広い音楽性だ」という印象を受けるだろう。まさにそれに決定打を与えてくれたのがこの曲。前作を知る方が聞くと、かなり驚くだろう。その決定打となるのもこの曲。ライブの定番「ANOTHER FAITH」がまさか和楽器バージョンで生まれ変わるとは誰も想像できないようなアレンジであった。私が在籍時にスローバージョンとして小太鼓を使ってリハーサルをした経験はあったが和太鼓や尺八、三味線をメインにもはやロックの領域を超越してくるとは考えたこともなかった。まさに「ANOTHER」な世界を目の前で見せつけられたような気分である。

#### 05. Just you wait I mean it

バンドでは珍しいインストの楽曲。過去作品 BLACK TEARS から繋がっているアルバムということを実現したという話の通り当時のピアノインスト曲「monochrome」のメロディを軸に、押し寄せる波の如く様々な楽器の音色が層を作っていく。まるで「ミルフィュー」のように。そしてこのストーリーは勢いを加速させ続け遂には次の曲へと吸い込まれるように続いていくのである。

#### 06. 無反応ネガクローム

リーダーの「藤咲結衣」選手によると、このアルバムのリードトラックとなるのがこの曲。S NOBvELと並んでこのアルバムの象徴である大作だと認識したが、No.5から続いていることを考えるとこの曲の大作ぶりが半端ないことに気がつく。そしてこの重要な楽曲に起用された「+Kaise」選手のボーカルの凄まじさは他のどの曲よりも輝きと勢いが増していき、圧巻の一言だ。ボーカルの勢いに反応するように楽器の勢いも増していくという、チームがひとつになっていることが音からわかるのが本当に凄い。初期の代表曲の出番は必要にならないほど、チームは新たな代表曲として自信を持って送り出せる究極の作品を作り出すことが出来たのだ。強さを手に入れた ONE MORE Purple の快進撃の序章を確信した私は来季あたりからは是非また奏者として加わりたくさえ思わせてくれた美しくも激しいエモーショナルな曲だ。

#### 07. 銀壁の舞

ここで後半のエースボーカルに繋ぐ、いい意味でのマーブルミックゾーン的な中継地点が登場。ここでは前半、後半のメインボーカルとしては選出されなかったがこのアルバムの中継地点を任された重要なポジションを担うボーカリスト数名がそれぞれの個性を発揮。女性ボーカリストの「SMITH (すみす)」選手と同じく女性ボーカリスト「夢莉子」選手に、男性ボーカリスト「真城由理」選手のボーカルが加わる合唱がかなり心地よい「新しい空気」を生み出している。チームだからこそ実現可能なスタイルをここで実感が出来ると同時に、藤咲サウンドと合唱要素の相性の良さは業界屈指なのではないかとさえ（言い過ぎですね）思えるほど。過去の曲にはない新たな代表曲になるのは間違いなく、女性ボーカル陣がここまでマッチしてくるとなるといよいよ女性ボーカルメインの作品の続編に期待が高まっていく。

## 08. Xavier Performance

前作でも活躍した女性ボーカリスト「はるきをん」選手の圧巻なゴスペルテイストの歌が響く。そこに濃厚なギターサウンドとピアノが加わりダークながらも幻想的な景色が広がる中、「真城由理」選手による歌声と合唱団のコーラスが折り重なっていく。サウンドもレーザービーム的な音からデジタルシンセまで幅広い音色が加わり、ベースも徐々に「苦殺」選手のレコーディングが行われ、まさに新しい音と過去の音を結びつけるようなマーブルミックス要素が満載な楽曲に仕上がっている。

## 09. AROMA ESSE (Snowbell ver.)

ここで女性ボーカリスト「はるきをん」選手がメインボーカルとなる新たなバージョンの AROMA ESSE が登場。「真城由理」選手がメインボーカルで、「はるきをん」選手のポエトリーでリリースされた初代 AROMA ESSE で聞き慣れていると真逆なアプローチなので完全に新しい楽曲として楽しめる。どちらのバージョンもこの楽曲世界にマッチしているので聴き比べたり、気分によってチョイス出来るようになったのはチーム型ロックバンドの生んだ「実績」と言ってもいいのではないだろうか。こちらのバージョンの「真城由理」選手のポエトリーはアルバム通しての聞き所だという声もあるぐらいハマっている。

## 10. SALZ PIT A

本来「SALZ PIT F」とは全く異なるリズム、テンポで制作されていたが、この曲特有の疾走感が消えてしまい試行錯誤の末、悩みが続いていた中「小川そよぎ」選手の提案で「SALZ PIT A」の新たなリズムを「SALZ PIT A」の土台に重ねたらどうかという試みの結果、見事にマッチ。この SALZ PIT シリーズの完成形がこうして生まれたのだと聞いた時、このアルバムは改めて、色んな過去の作品から点と点、線と線で繋がっているんだと思わされた。この曲から 15 曲目までの後半セクションは、男性ボーカリスト「なぐさ。」選手が抜擢され担当。女性ボーカルの「SALZ PIT F」とはまた別の緊張感や透明感を待ち合わせていてこの曲のシンプルさに最高のアクセントを加えてくれている。

## 11. 雪鳥沢 -ユキドリミドリ-

「ワスレナグサのそよぎ」という歌詞が印象的な切ないメロディが際立つリードトラック。まるでボーカルの「なぐさ。」選手とピアノの「小川そよぎ」選手の巡り合わせを作詞の「藤咲結衣」選手がコーディネートしてかのような不思議な感覚に私はちょっと微笑んでしまった。雄大な景色に勇ましいユキドリたちの人生を描かれたストーリーが彼らの音楽人生とどこかリンクしているように感じるのだ。転調が繰り返され目まぐるしいシーンの切り替えがスムーズに行われるというあまりないタイプの楽曲なのに代表曲に推してもいいほどの忘れられないメロディが、気づけば虜になっていたりする中毒性がやばい。数多くの楽曲がラインナップされたこのアルバムの中でもメンバーが口を揃えて「一番レコーディングに時間がかかった」「愛着がある曲」と話すほど、この楽曲へのメンバーの愛情は高いことが伺える。

## 12. Curdle Snow

「BLACK Chocolate」「Portliness」といったチームの初期の名曲がある。その時代に肩を並べていてリハールでは何度も演奏していた曲が原曲になっているという。次第に BLACK TEARS の楽曲たちとは別次元にあると感じ、その頃から続編用ということで手を付けずに温めていた曲であったが現メンバーたちの多彩なアイデアと演奏により原型はほぼ消えたといえるぐらいブラッシュアップされ、今の形に至ったというエピソードが実にチーム型ロックバンドらしいなと感じた。そこにボーカリスト「なぐさ。」選手の透明感のある美しい歌声が加えられ遂に、二度と作れないような独自のメロディを生かしたアップテンポのロックサウンドを作り上げたのだと推測出来る。短命なロックバンドが多い中、幾度もの崩壊の危機を乗り越えて何年も前に生まれた曲が今の新しい力によって完成というストーリーそのものが「春夏秋冬」の観点から雪を捉えたこの楽曲のストーリーと一致しているように私は思う。

## 13. Candle Snow

2019年にはライブで登場し、当時のリスナーからは一番人気だったという説明を受けたことがある。確かにキャッチーで一度聞いたら忘れない存在感。リーダーのコメントでもこの曲は本来このアルバムのメインのリードトラックになる予定だったが、この曲をこの位置に置けるほどこのアルバムは前半にも強力なナンバー揃いなんだと言っていたように主力と計算されていた楽曲達が後半に立て続けに並べられているのもこのアルバムの強み。前作ではボーカルはポエトリーで構成されていたがいよいよ完成形が満を持して姿を見せることとなった。ライブでも中心的存在になっていく予感がしている。「なぐさ。」選手のボーカルがこの曲にベストマッチで聴いている者を一瞬で惹きつけていく魅力が満載の楽曲。

## 14. This is the time to focus

新加入のラップ・ボーカリスト「ROOMY」選手が大抜擢。ラップを本格的に導入した楽曲はバンドでは初の試みということだったが、これがまるで以前からやっていたかのような違和感の無さに驚く。また、ドラム担当の「広末涼太」選手と「藤咲結衣」選手による共同作曲という形で、これまでとは違う雰囲気楽曲をバンドのレパートリーに加えられた点もかなり大きいのでは。こういうことも含めて他の曲の解説にも書いたように「点と点」「線と線」がすべてに繋がっているように感じているが、この繋いでいる部分は実は「雪」であり、その背後でベルの音色が鳴り響いているように解釈している自分がいる。そういう解釈をするとすべてが紐解けていき、アルバム全体の印象もまた変わっていくような気がする。

## 15. GewurztramIner

アルバムのエンディングを彩る、ONE MORE Purple お得意のダークで切なく壮大な世界観のナンバー。歌詞のところどころに過去に披露されてきた楽曲のワードが使われている。当時、マイナス思考だったワードが前向きに進化しておりあのアルバムとこのアルバムがここで完結したと感じる瞬間である。しかしラストのピアノの音色が夢の続きはまだ先にあるようにも思えたりもする。いや、本当のスタートはもしかしたらここからなのかもしれない。前を向いて顔を上げていきたいと思える感動のエンディングへ。